

田宮虎彦の作品検証から見えるもの —『沖繩の手記から』『姫百合』などを中心に—

太田 一直

本発表は去る2002年3月にドイツのボン大学で研究発表、2003年10月に『第4回 沖繩研究国際シンポジウム ヨーロッパ大会 世界に拓く沖繩研究 2002』に掲載された「田宮虎彦と沖繩—『沖繩の手記から』『姫百合』などを中心に—」の続編である。

本発表では前掲論文でカバーできなかった田宮虎彦の沖繩を描いた作品（『沖繩の手記から』『姫百合』など）の初出雑誌や初版本を具体的に比較することを通して、初出雑誌から初版本にする段階でどのような変化があったか、その変化が作品にどのような効果をもたらしたかを確実に検証することを第一目的とするものである。

従来、田宮虎彦は『足摺岬』『落城』など、彼の生涯の前半の作品が有名で、評価や論文もそこに集中する傾向があるが、それは田宮虎彦の一面を示すものに過ぎないと私は考えている。彼の生涯の中・後半の作品と考えられる『沖繩の手記から』『姫百合』は、前半の『足摺岬』『落城』とは違った傾向の作品であることを、検証により確かなものになりたいと考えている。

初出雑誌から初版本になる間には、田宮虎彦の沖繩旅行がある。この時、田宮虎彦は今までとは違った形で沖繩旅行の体験を作品に活かすことに成功した。そのことが作品の完成度や文章の丁寧さに表れていると私は考えている。

また、時間が許すようであれば、『足摺岬』『落城』など、彼の生涯の前半の作品の初出雑誌と初版本の比較も行い、『沖繩の手記から』『姫百合』との創作過程と比較できればと考えている。そのことにより、田宮虎彦の作品創作の変化を実証し、併せて作家田宮虎彦の全体像を把握することにつなげていきたいと考えている。

以上のように、本発表は田宮虎彦の作品の創作過程を通して、田宮虎彦の作家としての成長過程を明らかにすることを最終目的とするものである。

田宮虎彦の作品検証から見えるもの

—『沖繩の手記から』『姫百合』などを中心に—

国文学研究資料館事務補佐員 太田 一直

一、本発表の目的

本発表は去る2002年3月にドイツのボン大学で研究発表、2003年10月に『第4回 沖繩研究国際シンポジウム ヨーロッパ大会 世界に拓く沖繩研究 2002』に掲載された「田宮虎彦と沖繩—『沖繩の手記から』『姫百合』などを中心に—」でカバーできなかった『沖繩の手記から』と『姫百合』の初出雑誌や初版本等を具体的に比較することを通して、初出雑誌等から初版本にする段階でどのような変化があったか、その変化が作品にどのような効果をもたらしたかを検証することを主要目的とするものである。

二、検証結果について

1. 『沖繩の手記から』の場合

『沖繩の手記から』の成立過程は複雑である。田宮虎彦が『沖繩の手記から』の着想を得たといわれる「K氏の手記」に出会い、それをもとに小説を書くことを許してもらったのは1949～50年のことである（田宮虎彦『「沖繩の手記から」について』「密林」1971年7月）。更に田宮は、この時から最終的に『沖繩の手記から』の初版本を1972年に新潮社から出版するまでの約20年間の間に、そのもととなる「連作」と言われる作品群をいくつか雑誌に発表・連載しているのである。このことは田宮本人も認めている。

次ページの表は、その過程を田宮の2回の沖繩旅行と沖繩の日本復帰の時期を入れて示したものである。これを見てわかることは、①1952年から1956年までの作品群（5作品）は4章と5章の間以外は一部ではあるが接点があること、②最初の作品『女の顔』は3章の一部と4章、7章の一部を扱っており、はじめは1章からでなく真ん中あたりから執筆を始めていること、③他の章に比べて1章から3章を書くのに集中して時間をかけていること、④沖繩の日本復帰という一大イベントにあわせて長編小説『沖繩の手記から』が発表されている、という4点である。①からはすべてを合わせて長編小説にすることができる要素をはじめから備えていたということが考えられるし、②③は自分の書きやすいところから作品を書き始めているということ、全体の中でとりわけ1章から3章を執筆するのに苦労していたことがわかると考える。実際にそれぞれを比較検証した際、1章から3章は他の章に比べ大幅な修正や削除・追加・段落や文章の順番の移動等が多く行われており、複雑に変化しているという印象を受けた。そのため、『沖繩の手記から』の場合はそれぞれの章ごとに、どの段階で、どのような修正・追加・削除・段落や文章の順番の移動等があったかを事細かに検証していくことが必要であり、重要であるという結論に達した。

また、④についてはたまたま偶然かも知れないが、『沖繩の手記から』の題材である沖繩に注

目が集まる時期にぴったり当てはまった発表ということになり、取材をするにも時期も得ていたということになると考える。発表した雑誌の性格も重要な要素になるだろう。

『沖縄の手記から』の成立過程							
『K氏の手記』 1949～50年頃	(詳細は不明)						
『女の顔』 1952年11月 「別冊文芸春秋」		3 (一部)	4			7 (一部)	
『ある手記から』 1953年3月 「新潮」				5	6		
『夜』 1953年8月 「世界」						6 (一部)	7
『激戦まで』(28枚) 1953年10月 「明窓」	1	2	3				
『沖縄の手記から』 (130枚) 1956年2月 「文芸」	1	2	3				
沖縄旅行(一回目) 1960年6月20日～(17日間)							
沖縄旅行(二回目) 1970年5月(具体的な日数は不明)							
『沖縄の手記から』(一) 1971年7月 「密林」	1						
『沖縄の手記から』(二) 1971年10月 「密林」		2	3 (半分弱)				
『沖縄の手記から』(三) 1972年1月 「密林」			3 (半分強)	4			
『沖縄の手記から』(四) 1972年4月 「密林」					5	6	7
沖縄、日本に復帰 1972年5月15日							
『沖縄の手記から』 (430枚) 1972年8月 「新潮」	1	2	3	4	5	6	7
『沖縄の手記から』(単行本) 1972年12月初版 新潮社	1	2	3	4	5	6	7
※□の中の数字は章数。							
太田 一直「田宮虎彦と沖縄—『沖縄の手記から』『姫百合』などを中心に—」・山崎行雄「田宮虎彦論」(オリジン出版センター 1991年)・田宮虎彦の沖縄紀行文をもとに、太田が作成。							

内容の観点からの検証結果としては、①最初の設定とは違う設定になっているものがある、

②旧漢字や送り仮名など、表記を訂正している部分が多い、③軍隊言葉や陸軍・海軍組織関係の階級や兵器・武器等の名称の訂正、④特定の言葉の削除が多い、⑤登場人物の名前の変更、⑥作品の大まかな骨格は沖縄旅行後の「密林」発表時に出来上がり、「新潮」から新潮社の初版単行本になる際にはさほど大きな変更はない、⑦言葉の言い換え・文末の修正など、表現の確実性を考えた修正・変更、などが挙げられる。

2. 『姫百合』の場合

これに対して『姫百合』は、田宮が一回目に沖縄旅行をした3年後の1963年3月に「文芸朝日」に「読切力作百枚」として発表され、翌年の1964年9月に講談社から単行本が初版として出版された。これもこの2つの作品を比較検証してみたが、20か所ほどの修正・追加・削除があったぐらいで、『沖縄の手記から』の大幅な修正・追加・削除には到底及ばない。もちろん、その修正が作品内容を全く変化させなかったとは言わないが、この作品でそれよりも重要なのは、この作品以前に書かれている、第一回の沖縄旅行を題材とした田宮の沖縄紀行文からの影響がこの作品に多く見られることである。

この作品以前に書かれている田宮の第一回沖縄旅行の沖縄紀行文を列挙していくと、下記のようなになる。

- ① 『広島・長崎・沖縄』 1960年8月 「中国新聞」
- ② 『沖縄の中の日本人』 1960年8月 「サンデー毎日」
- ③ 『遠い東京』 1960年8月 「日本経済新聞」
- ④ 『見てきたばかりの沖縄の素顔』 1960年9月 「旅」
- ⑤ 『文学のひろば』 1960年10月 「文学」
- ⑥ 『宮古島紀行』 1960年10月 「新潮」
- ⑦ 『辺戸岬』 1960年11月 「岬」(有紀書房版)
- ⑧ 『はだしの女』 1960年11月 「今日の琉球」
- ⑨ 『美しい沖縄』 1961年1月 「琉球新報」
- ⑩ 『暑い沖縄』 1961年5月 「芸林」

後に、この紀行文は一部題名を変更して単行本『笛・はだしの女』(1961年7月・光文社刊)に収録された。収録の際、追加・削除等された部分もあるが、ここでは触れない。

沖縄を舞台にした作品なのだから影響があるのは当然のことなのだが、『姫百合』にはこの紀行文から引用したのではないかという部分がいくつか見受けられるのである。普通、そのような部分はわざとぼかすのが小説としての独立性を保つことになると思いますが、田宮の考えは違った。その証拠に田宮は単行本『姫百合』(短編集)のあとがきの中で「『姫百合』についてだけは、もし読者が私の『笛・はだしの女』(昭和三十六年七月・光文社刊一随筆集)をあわせ読んでいただけるならば幸いと思っている。」と書いているのである。わざわざ小説の題材を公表しているのは『沖縄の手記から』でも共通している。つまり、『沖縄の手記から』における「連作」に相当するものが『姫百合』における第一回沖縄旅行の沖縄紀行文と考えるのも良いのではないかと私は考える。

また、『姫百合』の内容をよく確認すると、ヒロインである貞子は『沖縄の手記から』の当間

キヨと境遇が同じと言ってよく、当間キヨが戦争で生き残った場合のバージョンとして描かれていると考えられる。主人公の田辺は田宮と境遇が似ている部分があり、田宮の分身とも考えられる。『姫百合』に描かれたエピソードには『沖縄の手記から』にも共通のエピソードもあり、『姫百合』と『沖縄の手記から』は同じ沖縄旅行の収穫から生まれた作品であることを証明している。

三、これからの検証と課題

『沖縄の手記から』『姫百合』ともに、作品内容の詳細な比較検証はこれからだが、この段階でも言えることはある。それは、両作品とも沖縄旅行がなければ成立し得なかった作品であるということである。『沖縄の手記から』の場合、作品の大まかな骨格が沖縄旅行後の雑誌「密林」発表時に出来上がったこと、『姫百合』の場合、第一回の沖縄旅行を題材とした田宮の沖縄紀行文から引用がいくつか見られること、あとがきでそれをあわせ読んでほしいと田宮自身が書いていることがそれを証明している。

このような傾向は以前の田宮の作品にはなかったものではないかと私は考えている。田宮はその代表作『足摺岬』でも「この作品を書いた時、実は、私は、実際には足摺岬を知らなかった。」(田宮虎彦『私の履歴書』日本経済新聞 1985年11月)と書いている通り、取材をしなくても小説が書けてしまう小説家であった。取材で得られる現実よりも自身の心の世界を重視し、書物等の情報で得た知識を自身の心の世界にはりあわせて心の中の世界を形象化することを重視した作家であった。しかし、『沖縄の手記から』『姫百合』では取材で得られた現実を重視することによって今までとは違った、田宮の沖縄観が表出された作品となった。取材による沖縄の現実が、田宮の心の世界を変え、現実性を帯びた響きとして、これまでの田宮の小説にない現実性を引き出したのである。そして、そのことを最もよくわかっていたのは田宮自身であった。田宮が『沖縄の手記から』とその系列作品の付記やあとがきで、多くの人々から教示を受けたこと、既刊の戦記、沖縄についての諸著作から知見を得たことを繰り返し主張し、感謝していることはその証左であり、その上で作品があくまで自分の創作であり、責任は自分にあるとし、あくまで小説として読んでほしいとしているのも以前の田宮の作品にはなかったことだと私は考える。

そう考えてみれば、『足摺岬』『落城』など、彼の生涯の前半の作品だけで田宮虎彦の全てを語ることはできない。それは田宮虎彦の一面を示すものに過ぎない。『沖縄の手記から』『姫百合』の比較検証の後で『足摺岬』『落城』等、田宮の生涯前半の「連作」や初出雑誌・初版本等を比較検証し、『沖縄の手記から』『姫百合』の創作過程と比較すれば、田宮の作品創作の変化が実証され、併せて作家田宮虎彦の全体像を把握することにもつなげることができるであろう。